

## 談話の構造

野村 眞木 夫 (上越教育大学)

談話とは、人の行うコミュニケーションにおいてかわされる言語表現の具体相をさし、話し言葉か書き言葉を区別しない。談話の構造は、所与の資料を静的に記述することにとりだされる傾向にあったが、これは誤りである。談話はその構成素が形成する複数のシステム、およびそこに見いだされる多様な関係性によって、動的に構造化されている。だから、談話の構造は関係とシステムの現実の型と規則として定義される必要がある。

談話は、(1)コミュニケーションの組織、(2)談話の話題、(3)談話の作動の三つのパラメータで特徴づけられる。そこに内在する関係性には、次の五つのシステムを想定することができる。(a)語句の意味関係とその系列の関係、(b)提題表現・叙述表現の関係、(c)意味の産出関係と言及の関係、(d)文・発話の相互関係、(e)パラグラフ・パラトーンの相互関係。各システムは独立に定義されるが、たがいに連動している。談話に(a)―(e)の関係にもとづくまとまりが観察されるとき、これをその談話が構造化されていることの根拠とみなす。コミュニケーションの参加者は、談話そのものに言及し談話の部分に関係づけることで談話を創出し、これを構造化するのである。

このような現象をとらだすためには、統語論の範疇や語の意味を指標として談話をとらえるマイクロのレベルと、談話を文化的・社会的または制度的に規定するマクロのレベルとの中間に想定される、メゾのレベルでの考察が有効である。メゾのレベルとは、文や発話の意味・機能あるいは表現類型を指標にすることで、談話およびその部分のまとまりの組織を生成する領域をさす。三つのレベルは、ボトムアップ・トップダウンの両方向で相互に依存しあっている。

とくに、メゾのレベルでは、表現類型を指標にしながら、日常会話に現れる経験の物語を創作的な物語と同一の地平で検討するなど、話し言葉と書き言葉を対等にとりあげることが可能になる。いわゆる語り手と読者の関係は、この立場によってコミュニケーションのシステムのなかでとらえなおすることができる。また、国語教育や日本語教育の観点から分析されてきた「クラスルーム・トーク」は、話し言葉に見いだされる多様な関係性の資源であるだけでなく、さらに書き言葉による教材や種々の学習材に言及する高次の談話として、すぐれた研究対象になるだろう。現状は、談話の研究がこれまでの書き言葉を中核とした文章論や文体論の領域から乖離する傾向を顕著にしているように

思われるが、あらためて、各領域を緊密に結びつけるネットワークを形成することが求められる。